聖書における男女の平等――教えることと指導することにおいても

Hans-Jörg Ronsdorf · 2023年9月 · 2026年10月改訂

概観と内容

用語の簡単な案内[1]：

- **教えることと指導すること**
- **補完主義**
- **平等主義**

女性が指導し教えることに反対する論拠

- **教えることの禁止**
- **沈黙の命令**
- **かしらと服従**
- **イスラエルの男性祭司とイエスの12弟子**
- **長老、監督、執事の資格**

教えることと指導することにおいても男性と女性が平等であることを支持する論拠：

- **創造に基づく論拠**
- **旧約聖書の女性たち**
- **新約聖書の女性たち**
- **歴史的論拠――教会史における女性たち**
- **救済論的論拠**
- **カリスマ（賜物）に基づく論拠**

まとめ

- **両性の関係についての私の定義**

引用：「そうです。実に二つの聖書テキストが、何世代にもわたって女性たちの存在そのものを左右してきたのです。」

この文を初めて読んだとき、私は、これは純粋なフェミニズムのように聞こえる、と思いました。何年もたった今日、私は、誇張した言い方ではあっても、この文が正しいことを認めざるをえません。つい最近も、雑誌『IDEA』に掲載された記事や読者の投書が、そのことを改めて私に確信させました。

用語の簡単な案内：

指導することと教えること

教会を指導する人々は、新約聖書（以下NTと略記）の中でさまざまな言葉で呼ばれています。

- 監督（ギリシア語 episkopos；ピリピ1:1; テモテ第一3:1）、
- 長老（ギリシア語 presbyteros；テトス1:5）
- 執事（ギリシア語 diakonos；テモテ第一3:8）
- 牧者（ギリシア語 poimen；エペソ4:11）
- 指導者、導く者（ギリシア語 hegeomai；ヘブル13:17; 使徒15:22はおそらく地域を越えた指導者）

使徒の働き20章17節、28節では、監督と長老が同義語として、一つの奉仕・職務を表す二つの呼び名として用いられています。彼らの奉仕の内容よりも、むしろ必要な資格のほうが記されているのですが、それでも次のことは確認できます。

- 彼らは教会の「上に立ち」、配慮をもって教会を導き、神の前で教会に対して責任を負います（テサロニケ第一5:12; ヘブル13:17; ペテロ第一5:2-3）。
- 彼らは内部の危険（争い、分裂など）から教会を守り、誤った教えに立ち向かい（テトス1:9; 使徒20:28-31）、戒めます。
- 彼らは人々を牧会的に世話し、弱い人々を助けます（テサロニケ第一5:12; ヘブル13:17; 使徒20:35）。
- 牧者のように、彼らは教会に導きと保護と霊的な糧を与えます（使徒20:28; ペテロ第一5:2以下）。群れとは教会のことであり、強い者と弱い者、老いた者と若い者、女性と男性、青少年と子どもたちから成っています。

ペテロとヨハネを除けば、新約聖書の中でこのような人物は、男性であれ女性であれ、一人も名前を挙げられていません。もしかすると一つ例外があるかもしれません。コリント近郊のケンクレアのフィベが、奉仕者（ギリシア語 diakonos）、また後援者・指導者（ギリシア語 prostatis）と呼ばれています（ローマ16:1-2）。

今日私たちが知っているような牧師は、新約聖書には存在しません。それは、これらの用語とそれに属する奉仕を一つにまとめたもの、あるいは混ぜ合わせたものなのです。ですから新約聖書は、そのような人物について語りかけることはできません。そのような形では存在しなかったからです。また、女性が牧師になれるかどうかを禁じることも、支持することもできないのです。

使徒の働きとパウロの手紙は、初期のパウロの教会における正式な職務について述べていません。教会がどのように指導されていたのかを正確に把握することは、今日の私たちにとって困難です。新約聖書の証拠には、統一された指導者の呼び名が見られないからです。指導は重要であり、強調されていましたが、パウロはしばしばほかの指導者たちを、ごく一般的に「同労者」や

「ともに戦う者」と呼びました。彼は、指導者に肩書きを与えるよりも、その働きに即して指導者について語ることを好んだのです。

教師であること（ギリシア語 didaskalos、コリント第一12:28）と、指導者・上に立つ者であること（ギリシア語 kybernesis、12:28；あるいはギリシア語 proistemi、ローマ12:8; テサロニケ第一5:12; テモテ第一5:17）とは、異なる働きであり、異なる賜物です。しかし一人の人がその両方を持つこともありえます。

上に立つことや指導することは、支配することを意味しません（女性が男性を支配することを禁じられているテモテ第一2:12の意味においてもそうです）。イエスはこれらの奉仕を次のように描いておられます。

> 「ほかの十人はこれを聞いて、ヤコブとヨハネに腹を立て始めた。そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた。『あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者と認められている者たちは、人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。しかし、あなたがたの間では、そうではありません。**あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。**』」マルコ10:41-44
>
> 「また、彼らの間で、だれが一番偉いと思われるかという議論も起こった。すると、イエスは彼らに言われた。『異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています。しかし、あなたがたはそれではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は、一番若い者のようになりなさい。**上に立つ人**（ギリシア語 hegeomai）**は、仕える人のようになりなさい。**食卓に着く人と給仕する人と、どちらが偉いでしょうか。食卓に着く人ではありませんか。しかしわたしは、あなたがたの間で給仕する者のようにしています。』ルカ22:24-27
>
> 「あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、自分から進んで監督しなさい。卑しい利益を求めてではなく、心を込めて行いなさい。割り当てられている人たちを**支配する**のではなく、むしろ群れの模範となりなさい。」ペテロ第一5:2-3

監督の奉仕には権威が含まれています。それは神から与えられ、さまざまな賜物によって裏づけられ、模範的な生き方の中で道徳的な権威として認められる権威です。教会は監督を、その職務とともにそのような者として認めるのです。

使徒たちの**教え**があります。それは良い、健全な教えであり、敬虔にかなう教え、私たちの救い主である神の教え、キリストの教えです（使徒2:42; テモテ第一1:10; 4:6; 6:3; テトス2:10; ヨハネ第二9）。教えの内容は福音、神のご計画、そして究極的には旧約聖書と新約聖書から成る聖書全体です。テモテはこれを教えるように求められ、長老は教える能力を持つべきであり、また教師という御霊の賜物、恵みの賜物があります。

指導することには、教えることも含まれます。それは支配することとは何の関係もありません。ここにも権威があります。しかしその権威は、教える能力を与えられていること、そして教会の枠

組みの中で、健全な教えを伝え、真理のみことばをまっすぐに説き明かすことのできる者として認められていることにあるのです。教師は学ぶ者たちに仕えます。

私たちの教会の礼拝で行われているような**説教**は、教えることと同じではありません。パウロは「説教」を、奉仕の賜物と働きのリストに挙げていません。おそらく、説教は教会の集会で普通に行われていたことではなかったからでしょう。それは信者仲間への奉仕ではなかったのです。新約聖書において、キリスト教の奉仕という文脈での説教は、実質的に福音を伝えることと同じ意味です（ギリシア語 kerysso、説教する、告げ知らせる、宣言する）。そして最初から、女性たちは自分の家族や友人たちに、さらにその外へと、福音を宣べ伝えていたのです。

さて次に、聖書にはそのままの形では見られない二つの用語についてです。それらは、キリスト教界における性別の問題についての、二つの対立する考え方を表す名称です。

補完主義

この用語はアメリカに由来し、ジョン・パイパー（John Piper）やウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）といった著名な神学者たちによって男女の関係に当てはめられました。この立場は、1988年に、いわゆる**Danvers Statement on Biblical Manhood and Womanhood**（ダンバーズ声明）として公表されました（ドイツ語版はここからダウンロードできます：**Danvers-Erklaerung.pdf (reformierte-freikirche.de)**（許可を得て掲載））。それ以来ようやく、この用語はドイツ語圏でも男女の関係を表すものとして定着しました。ただし、それは階層的な関係としてです。女性は同じ価値を持つけれども、同じ立場にはない、というのです。両性の区別は「同じ価値を持つが、異なる役割」と表現されます。女性であるがゆえに、してはならない奉仕がある、というわけです。この見方によれば、そこには何よりも男性を教えることと指導することが含まれます。

しかし補完主義は、教会の歴史的な教えを反映したもの**ではありません**。教会の教えは、およそ60年前まで、女性は男性より価値が低く劣っているという前提に立っていました。そのために女性は従属的な立場に置かれていたのであり、全体として女性に対する低く制限的な見方だったのです。補完主義が主張するような、同じ価値と広範な平等は新しい現象であり、およそ60年より古いものではありません。男性の優遇と女性の制限がどのように解釈されるかについては、さまざまな形、つまり幅があります。

私は今日の福音派の補完主義を、家父長制の改訂版、穏健な、あるいはソフトな形態と見ています。そして家父長制は、堕落の結果なのです。その際、上に述べた意味で補完主義的に理解され、生きられている関係であっても、うまくいっている愛に満ちた夫婦関係があることを私は承知しています。しかしだからといって、この立場が正しいものにも、聖書的なものにもなるわけではありません。

平等主義

英語圏では、私がある程度の留保をつけつつ主張している立場は、平等主義（Egalitarianism）と呼ばれています。その際大切なのは、この用語の背後に正確に何があるのか、その内容が正確に

何であるかということです。男女についてのこの見方は、補完主義と同じ時期に生まれました。ドイツ語の用法で「平等主義的」（egalitär）という言葉は、社会的正義と機会均等を目指すものです。その定義は、社会や共同体の中で、性別やその他の特徴を理由に不利な扱いを受けないこと、というものです。

私はそれを全面的に支持します。そして信仰を持つ女性たちも、過去100年の女性の権利運動が勝ち取ったすべての成果を、感謝して享受してよいのです。たとえ彼女たち自身がそうした運動の一部であったことがなく、また一部になりたいと思っていなくてもです。

しかしこの用語には、何もかも同じにしてしまう画一化という響きもあり、私はそれも同じように拒否します。多くの点における男女の美しい違いは創造の秩序に属するものであり、平等主義によって平らにならされてはなりません。むしろ、互いに、相互に向かい合う存在であることを強調する**相互主義**（Mutualismus）という用語のほうが望ましいでしょう。

個人的なこと

数年前まで、私は補完主義を主張し、自分の教会と結婚生活においてそれを生き、教えていました。それは、夫として私は妻を愛し、協力的であるけれども、原則として指導権と最終決定権は私にある、ということを意味します。また、女性は指導せず、説教せず、教会の前で教えない、ということも意味します。この世の家父長制の「ソフトな」、あるいは「キリスト教化された」形態を、私は継続的な聖書研究と、聖書に忠実な著者たちの著作によって捨てざるをえませんでした。それは私にとって困難な過程でした。何十年もの間、まさに反対のように理解し、生きてきたからです。今日私は、自分がどれほど間違っていたかについて目を開いていただいたことを感謝しています。私は2020年に、私の本「Frauen vergebt uns」（『女性たちよ、私たちを赦してください！』）の中でそのことを詳しく述べ、私のホームページで、私自身やほかの著者たちの新しい論考によって、その根拠を示してきました。

www.hans-joerg-ronsdorf.de

講演の最後に、今日私が正確に何を主張しているのか、そして神学的な議論の中で自分の立場を何と呼んでいるのかを、簡単にまとめます。

指導することと教えることに反対する論拠：

今日の集まりは、このテーマについて根本的に異なる見解があることを示しています。そこにはしばしば多くの感情が伴い、それが事実に即した意見交換を難しくしています。この日、だれもが自分の歴史、自分が受けてきた影響、自分の確信、良い経験も悪い経験も、そして自分の期待を携えてやって来ます。そして願わくは、開かれた心と、ひとつまみの落ち着きをもって、自分自身を問い直す用意をも携えて。

以下では、教会において姉妹たちが指導し教えることに対して、私の見るところもっともよく出される異論を取り上げます。まさにこれらの論拠を、私自身も主張していました。それらは私にとってまったく明白で、納得のいくものでした。そこから外れることは、私にとって、聖書の中

心から離れて、同権やフェミニズムがさまざまなイデオロギー的な形で称賛されている世に順応することを意味していました。

教えることの禁止

私にとって明確な指示だったのは、ここに引用するこのパウロのことばでした。

> 「女は、よく従う心をもって、静かに学びなさい。**私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。むしろ、静かにしていなさい。**アダムが初めに造られ、それからエバが造られたからです。そして、アダムはだまされませんでしたが、女はだまされて過ちを犯したのです。」テモテ第一2:11-14

あるとき私は、一見明確な指示のように思えるにもかかわらず、女性が教えることのこの禁止は、ただ一つの節――繰り返しますが、ただ一つの節だけ――と結びつけることしかできないということに気づきました。この指示が、あらゆる時代のあらゆる場所に及ぶとされていることの重みを一度考えてみるなら、これは奇妙なことです。

この教えることの禁止の性格を見定めるためには、次のように問わなければなりません。それは全面的な禁止なのか。男性に対してだけ当てはまるのか。女性は女性や青少年や子どもたちを教えてよいのか。あるいは、誤った教えを教えてはならないが、健全な教えなら教えてよいのか。この節だけからでは、これに答えることは不可能です。

いつものように、ただ一つの聖書のことばだけが有効なのではなく、聖書全体に問いかけることが大切です。聖書を聖書と比べることが大切です。ルターのことばで言えば、「聖書は自らを解釈する」のです。

ですから私は、これから挙げる節を、上のパウロのことば、いわゆる女性に対する教えることの禁止と照らし合わせてみます。

> イエスは弟子たちに言われます。「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、**わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。**見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」マタイ28:18-20

これは、すべての人に、女性たちにも与えられた、教えよというイエスの委託です。女性たちもイエスの弟子の輪に属していました。女性の弟子たち、すなわち女性の生徒たちも、ほかの人々を教えることができるように、イエスのもとで学んだのです。**イエスがそれを望んでおられるのです！**それは、どのような枠組みでも、どのような場所でもありえます。教会の礼拝の集会においても、男性に対しても、女性だけに対しても、家庭的・私的な場でも公の場でも。

> 「彼（アポロ）は会堂で大胆に語り始めた。それを聞いた（夫婦の）**プリスキラとアキラ**は、彼をわきに呼んで、**神の道をもっと正確に説明した**」（使徒18:26）。

神の道、それは救いの歴史です。そしてキリスト教のバプテスマです。アポロは明らかにヨハネのバプテスマしか知らなかったからです。「説明する」とは、「教える」あるいは「教え導く」と理解

しなければなりません。テモテ第一2章12節を、すべての女性・姉妹に対する教えることの禁止と理解する人は、それをプリスカにも当てはめなければなりません。事実はただ、彼女は教え、黙っていなかったということです。それはエペソで起こりました。彼女とその夫がアポロを教えた場所――テモテが、教えることの禁止を含むパウロの手紙を受け取った場所です。ここに普遍的な教えることの禁止を読み取るなら、次のように言い表さなければならないでしょう。**私は、プリスカが教えたり男（アポロ）を支配したりすることを許しません。むしろ、静かにしていなさい。**霊感を受けた神のことばはそれ自体の中に矛盾を含んでいないという前提に私たちは立っているので、教会における女性に対する普遍的な教えることの禁止は退けなければなりません。

パウロは、キリスト者の集まりに**出席しているすべての人**にこう求めています。

> 「兄弟たち（きょうだい、つまり兄弟と姉妹という意味で）、それではどうすればよいのでしょう。あなたがたが集まるときには、**それぞれが**賛美したり、**教えたり**、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かしたりします。そのすべてのことを、成長に役立てるためにしなさい。」（コリント第一14:26）

パウロはテモテに、**人々**（ギリシア語 anthropois；兄弟**と**姉妹）がほかの人々を**教え**、その人々がさらにまたほかの人々を**教える**ことができるようにせよ、と指示しています。

> 「多くの証人たちの前で（テモテよ、）あなたが私から聞いたことを、ほかの人にも**教える**力のある信頼できる**人たち**に委ねなさい。」テモテ第二2:2

この意味で、**年配の女性たちは「良いことを教える者」**であるべきです（テトス2:3）。この教えの場所と枠組みは定められても制限されてもいません。とりわけ、彼女たちは若い女性たちを教え導くべきなのです。（**女性の長老たち；**ギリシア語 presbutidas。4世紀には女性の長老たちがそう呼ばれていました。しかしここでは単に年配の女性を指している可能性もあります。）

結論：女性が教えることに制限はありません。どこであろうと、だれを教えるのであろうと。決定的なのは、彼女の賜物、健全な教えを教えるという点での彼女の信頼性、そして彼女の奉仕が望まれている、あるいは教会とその指導者たちによって権限を与えられているという、教会による承認です。**ですから、ここに挙げたテキストを背景にすれば、このパウロのことばは、時代を超えた世界的な教えることの禁止ではありえないのです！**

テモテへの手紙第一が何度も示しているように、問題になっているのは誤った教えであり、それを家々に持ち込んだ女性たちです。ここでパウロは、エペソの裕福な女性たちの**地域的な問題**を扱っています。彼女たちは自分で自分を召されていると感じ、それをする資格、あるいは権威を奪い取っていたのです。これは**時間的に限定された指示**であり、この惑星のすべてのキリスト者女性に対する規範的な指示ではありません。エペソのこの一人、あるいは複数の問題のある女性たちは、まず進んで、学ぶ姿勢をもって健全な教えに従うべきでした。そうすれば彼女たちは教える力を身につけ、その後でひょっとすると女性の長老になることもできたでしょう。健全な教えに従って学んでこなかったために誤った教えを教えるというのは、証拠から見て、典型的な女性の問題ではありません。しかしそれはエペソにおける問題であり、テモテはそれに対処すべきだったのです。

「私は、女が男を**支配する**ことを許しません」という文の中の「支配する」という語（ギリシア語 authentein）は、肯定的な語ではありません。それは新約聖書の中でこの箇所にしか出てこず、ふつう支配するという意味で用いられる語ではありません。それどころか、それは否定的な語であり、「**権威を奪い取る**」（英語のKing James Versionの文言がそうです）という意味、**しかも不当に**という意味を持っているのです。

語ることの禁止

教えることの禁止のテキストは、しばしばコリント人への手紙第一14章の語ることの禁止と直接結びつけられます。この二つは、私たちのテーマについて明示的に述べ、特に女性を制限している唯一のテキストです。およそ10年前まで、私にとっては、女性が礼拝で黙っていることは明白でした。次の節がそれをはっきりと定めているとおりです。

> 「女の人は、教会の集まりでは**黙っていなさい**。彼女たちは**語ることを許されていません**。律法も言っているように、従いなさい。もし何かを学びたければ、家で自分の夫に尋ねなさい。**女の人が教会の集まりで語ることは恥ずべきことなのです**。」コリント第一14:34-35

私のこの明確な確信は、パウロ自身によって問い直されることになりました。パウロはその前の11章5節で、祈り、預言する女性たちについて語っています。それはきわめて高い確率で、礼拝の集会の中でのことです。さらに14章には、教会の成長のために言葉をもって参加するよう、すべての兄弟姉妹に向けたパウロの具体的な勧めが少なくとも五つあるからです。また、くちびるの実と呼ばれる賛美のいけにえを神にささげる全信徒祭司性も、沈黙のままでは考えられません。ついでに言えば、ハンナの賛歌やマリアの賛歌（マグニフィカト）が礼拝で朗読されるとき、これらの女性たちは霊感を受けたみことばを通して語っているのです。

ですからこれらの節は大きな謎です。パウロと新約聖書、そして旧約聖書が、全体としても個々の点でも語っているすべてのことと矛盾しているからです。大半の聖書読者が認めているこの矛盾に対しては、数えきれないほどの説明の試みがあります。聖書への忠実さという動機から、絶対的な沈黙を実行しようとする教会もあります。私はブレザレン運動の出身ですが、そこでは今日でもそのように実践されています。そこでは女性は説教してはならず、祈ってはならず、賛美歌を提案してはならず、礼拝を司会してはなりません。ただ一緒に歌い、アーメンと言うことしか許されていないのです。

この二つの節で、女性は三度、語ることを禁じられ、あるいは黙っているよう命じられています。**それは絶対的で厳格なものであり、回避することも、釈義によって解消することもできません。**ブレザレン運動の外にいる保守的な、あるいは聖書に忠実な解釈者たちは、この断定的な沈黙の命令を解消しようとしますが、それによって彼らは、絶対的な沈黙の命令を繰り返し骨抜きにしてしまっているのです。

フィリップ・B・ペイン（Philip B. Payne）は、これらの節がヴァティカン写本とフルダ写本（4世紀と6世紀の重要で大部の写本）において、後代の挿入として印がつけられていることを証明しました。さらに、この二つの節は、ある写本では私たちの聖書と同じように33節の後のこの位置にありますが、別の写本では40節の後になって初めて出てきます。これほどの規模でこうしたこ

とが起こるのは他に例がなく、このテキストが欄外の書き込みであり、後になって写字生によって、彼が正しいと思った位置に挿入されたことを示す手がかりです。いったん欄外から挿入されると、その後の写字生たちはみな、あたかもそれがもともとのパウロのテキストであるかのように、熱心に書き写していったのです。

新約聖書にも旧約聖書にも、これほど広範な結果――この場合は女性に対する結果――を伴う、わずかでも似たような要求で、このテキストを裏づけることのできるものはありません。ですから、このテキストは規範的な指示ではありえないのです。多くの聖書注解者や聖書翻訳者は、これらの節をパウロのものではなく、初期の挿入（2世紀）と見なしています。

ちなみに、これらの節を実際に首尾一貫して実行することはほとんど不可能です。常識からしても、集会で女性がいっさい語ることを禁じることなどできないのは明らかです。

教えることと指導することについての議論全体において、これらの節は考慮の外に置かれます。

かしらと服従

いわゆる教えることの禁止のテキストと、いわゆる沈黙の命令は、女性に必要な服従を指し示しています。新約聖書では少なくとも7回、女性は夫に従うよう求められています。なぜでしょうか。創造の秩序がその理由ではありえません（これについては後で詳しく述べます）。創造の秩序は、服従を導き出せるような階層の違いを根拠づけていないからです。

主として問題になっているのは二つのテキスト、すなわちエペソ人への手紙5章とペテロの手紙第一3章のテキストです。

> 「キリストを恐れて、**互いに従い合いなさい**。妻たちよ、主に従うように、自分の夫に［従いなさい］。」エペソ5:21-22

パウロは何よりもまず、一方的な服従ではなく、互いに従うことを求めています。

> 「同じように、妻たちよ、**自分の夫に従いなさい**。たとえ、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって神のものとされるためです。……**同じように、夫たちよ**、［自分の妻に従い、］妻が女性というより弱い器であることをわきまえて、知識に従って妻とともに暮らし、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。そうすれば、あなたがたの祈りが妨げられることはありません。」ペテロ第一3:1, 7

ペテロにおいてもパウロと同じです。彼は一方的な服従ではなく、互いに従うことを求めています。それでも、いわば同じ息で、女性たちは従うよう求められています。当時の女性たちは、いずれにしても階層的に従属させられていました。彼女たちにとって、このような求めは何も新しいことでも、異質なことでもありませんでした。それは当時の文化的・社会的な共通認識だったのです。それまでは、もしかするとやむをえず従っていたのかもしれませんが、今やイエスの女性の弟子として、彼女たちはイエスの力によって、心から従うことができたのです。

使徒たちは、当時の古代の性別役割の関係に反対して書いたり働いたりはしていません。一方で彼らは女性の服従を確認していますが、他方で――そしてこれが新しいことなのですが――男性たち

に、愛すること、思いやりをもって振る舞うことを求めています。**男性たちは、指導せよ、統治せよ、支配せよ、ましてや服従を要求せよとは指示されていません。**

ルターによって「家庭訓」（Haustafeln）と呼ばれた、古代の家の秩序のための指示は、**福音とキリストの愛が、しばしば厳しく暴力的であった関係を変えることによって、当時の社会秩序を内側から掘り崩していくのです。**つまり、福音によってすべてが一夜にして変わるわけではなく、考え方と行動の変化の過程が始まるのです。その終わりには、たとえば奴隷制の廃止があります。それは使徒たちによって要求されたものではありませんでしたが、福音の核心にすでに備わっていたのです。

「キリスト者の」服従（すなわち信者仲間の間の服従、信仰を持つ夫と妻の間の服従を含む）とは、**謙遜で、誠実で、愛に満ちた敬意、協力、そして支えです。**謙遜や柔和と同じように、服従は普通のキリスト者の品性の特徴であるべきです。そして理想的には、それは相互的なものであるべきなのです。

男が女のかしら（Haupt）であるとは、どういう意味でしょうか（コリント第一11:3）。私たちがドイツ語から推測するのとは違って、それは、導き、指導し、支配し、統治する「首長」（Oberhaupt）という意味ではありません。パウロがこの比喩を用いたとき、それは**源、起源**を意味していました。ですから女は男から取られたのであり（11:8）、それゆえ男に敬意を表すべきだったのです。女のかしらとしての男は、女の支配者でも指導者でもなく、女を愛し、守り、養い、世話をする救い主なのです（エペソ5:21-33）。かしらという比喩は、男と女の愛に満ちた一体性と、キリストに倣ったそのからだへの配慮を描き出しています。

簡潔にまとめると、こう言えます。世俗のギリシア語辞典、ギリシア語聖書、そしてパウロの用語法は、パウロが「かしら」によって「権威」を意味していなかったことを示しています。**聖書はどこにも、女性との関係における男性の主権や指導的役割を教えていません。**

ヘブル語をギリシア語に訳した七十人訳聖書は、ヘブル語でかしらが指導者、首領、支配者という意味で用いられている場合には、kephaleという語ではなく、別の語を用いています。そこから、kephaleの意味がその方向を指していないことが分かります。

イスラエルの男性祭司とイエスの12弟子

祭司がもっぱら男性であったこと、そして12人の男性の弟子たちは、私にとって、指導はもっぱら男性によるものだという強力な論拠でした。

イスラエルには男性の祭司しかいませんでした。しかし私は、**男性も女性もすべての者**が祭司となることが、神の願いでありみこころであったことに気づかざるをえませんでした。

> 「**あなたがた**は、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。」（出エジプト19:6）

このことは未来についても予告されています。

> 「あなたがたは主の祭司ととなえられ、私たちの神に仕える者と呼ばれる。」イザヤ61:6

なぜ旧約聖書ではまだそうならなかったのかを言うのは困難です。理由の一つとして考えられるのは、レビ人の祭司職が、カナンの偶像崇拝における聖別された女性たち、すなわち女祭司や神殿娼婦と対照をなすべきものだったということです。

> 「イスラエルの娘たちの中に神殿娼婦がいてはならない。また、イスラエルの息子たちの中に神殿男娼がいてはならない。」申命記23:17

祭司の奉仕は、それがレビ人のいけにえの祭儀において行われる場合には、肉屋の仕事にも比べられるような重い肉体労働でした。男性は平均して（いつものように例外は別として）女性よりも体力があります。

新しい契約においては、神から生まれた者はだれもが祭司であるということが、無条件に当てはまります。ですから、旧約聖書を振り返ってみても、男性だけが祭司であった理由が性別であったはずはありません（ヘブル2-10章; ペテロ第一2:9; 黙示録1:6; 5:10）。

12人の弟子は、ユダヤ人の男性としてのみ、ヤコブの12人の息子、すなわちイスラエルの12部族を代表することができました。彼らは、古い契約から新しい契約への比類のない移行を表しているのです。

今日、指導者や監督はユダヤ人の男性でなければならないわけではありません。指導者になることを求めるすべての人が招かれており、異邦人の男性たちもそうです。12使徒がユダヤ人の男性であったことは、女性を指導的な務めから締め出すことを意味しません。女性であるユニアは、パウロによって女性使徒と呼ばれています（ローマ16:7）。バルナバが使徒と呼ばれたのと同じようにです（使徒14:14）。

長老と監督の資格

教えることの禁止が向けられていたエペソの女性（あるいは女性たち）は、ひょっとすると監督になりたいと思っていたのでしょうか。私たちの聖書の章の区切りでは、テモテ第一3章1節は次のように始まります。

> 次のことばは真実です。「**だれか**が監督の職に就きたいと思うなら、それはりっぱな働きを求めることである。」

パウロは、この女性（あるいは女性たち）が、それに続く資格を満たすなら監督になる可能性を十分に見ているようです。その第一歩は、静かに、従順に学び、外見において慎み深くあることでしょう。エペソの裕福な女性たちは、ふさわしくない振る舞いをするのではなく（2:9）、**良い行い**をすべきでした（2:10）。パウロは監督の職を指すのに似た表現を用いています。だれかが長老の職を求めるなら、それは**りっぱな働き**を求めることである（3:1）。長老の職は、これらの女性たちがそのための資格を身につければ目指すことのできる、りっぱな働きなのです。

しかし、パウロは3章1〜7節で男性だけに語りかけているのではないでしょうか。いいえ、決してそうではありません。「**だれか**」（ギリシア語 tis）は性別に中立な語です。それは、**彼女が、あるいは彼が**監督の職に就きたいと思うなら、という意味でありえます。**パウロは、女性に禁じられている職を目指すよう、女性たちを励ましたりするでしょうか。**パウロは、5節で「だれか／だれ

でも」を繰り返すことによって、「だれか／だれでも」がしばしば彼のテーマであることをはっきりさせています。テトスへの手紙1章6節にある監督の資格の並行リストでも同じです。**テモテ第一3:1-13やテトス1:5-9にある教会の指導者の資格の中には、男性の代名詞は一つもありません。ただし、そのことはドイツ語訳からは分かりません。**

しかしそれなら、「**一人の妻の夫**」という資格はどうでしょうか。この文言は、男性にしか当てはまらないと思われるでしょう。いいえ、そうではありません。この句全体が一つの**慣用表現**として理解されなければならないからです。ある人々は、一つの語、すなわち「夫（男）」を取り出し、それを文脈から恣意的に切り離して、そこから新しい要件――すべての監督は「男」でなければならないという要件――を導き出します。しかし大半の聖書解釈者は、補完主義者も含めて、「一人の妻の夫」を、**一夫多妻の男性や性的に不誠実な男性**が監督の務めから除外されるという意味に理解しています。

この慣用表現に二重の意味、すなわち一夫多妻者の除外と、監督は男性でなければならないという普遍的な要件の両方を読み込むことは不当であり、監督に対するパウロのほかのあいまいな要件の大半をばかげたものにしてしまうでしょう。すべての監督は、奴隷を抱えた「自分の家」と、「信じる」ことができ、「威厳をもって」従うことができる年齢に達した複数の「子ども」を持っていなければならないのでしょうか。

テモテ第一3章11節で女性執事の資格が挙げられている以上、3章12節の執事の要件にある同じ「一人の妻の夫」という表現が、女性を除外することはありえません。

「一人の妻の夫」に表されている**一夫一婦制**の原則は、男性にも女性にも等しく当てはまります。ちょうど「あなたの隣人の妻を欲してはならない」（出エジプト20:17）が、隣人の配偶者を欲する男性にも女性にも等しく当てはまるのと同じです。ですから「一人の妻の夫」のもっとも正確な訳は「**一夫一婦の**」です。それが、男性形を用いたギリシア語の慣用表現の包括的な意味をもっともよく表しているからです。

女性に監督の職を禁じる使徒的な指示（たとえばコリント第一14:34-35の沈黙の命令のようなもの）は存在しません。

では、もしこの問いが1世紀に持ち上がったとしたら、何を前提とし、何に従えばよかったのでしょうか。旧約聖書の時代にすでに男性による指導に例外があったのなら、もっと広い意味での社会においても例外があったのなら、女性に対するイエスと使徒たちの態度が支配的な文化よりも肯定的なものであったのなら、そして女性たちが御霊の賜物を受けてそれを用いたり、自分の家に家の教会を集めたりしていたのなら、教会における指導が女性に禁じられていたと考える根拠はなかったのです。

教えることと指導することにおいても男性と女性が平等であることを支持する論拠：

性別の問題において、一度中立的に、あるいは結論を開いたままで聖書に向き合ってみるなら、さまざまな側面のもとに平等を見いだすことでしょう。教えることと指導することというテーマ

は、聖書全体によって照らし出されなければならず、一つか二つの短いテキストによって決定されたり狭められたりしてはなりません。

創造の物語は、私にとって新しい発見でした。それは私に考えを改めさせ、このテーマについての新約聖書のテキストをどう読むべきかについても、進路を決める転換点となりました。ですから、私たちは一番初めから始めましょう。

創造に基づく論拠

男女どちらにも同じことが当てはまります。どちらも神のかたちを担う者であり、どちらも生み増え、支配するよう定められています。原初の状態には序列も階層もなく、また務めや役割の分担もありません。

> 「神は仰せられた。『**われわれのかたちとして、われわれの似姿に人を造ろう。そして彼らが**海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを**支配するようにしよう。**』神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。**神は彼らを祝福し、彼らに仰せられた。『生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。**』」（創世記1:26-28）

エバの創造は印象深く描かれています。彼女はなぜ造られたのでしょうか。

> 「人がひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、**一人の助け**を造ろう。**彼にふさわしい**助けを。」創世記2章18節（エルバーフェルト訳〔ドイツ語聖書翻訳〕。脚注：彼の**向かい合う者**として、彼に対応する者として）
>
> 統一訳（Einheitsübersetzung）〔ドイツ語聖書翻訳〕：わたしは彼のために、**彼と対等な**助けを造ろう。
>
> グーテ・ナッハリヒト（Gute Nachricht）〔ドイツ語聖書翻訳〕：わたしは、彼を助け、**彼に合う**存在を造ろう。
>
> チューリッヒ聖書（Zürcher Bibel）〔ドイツ語聖書翻訳〕：わたしは彼のために、**彼にかなう**助けを造ろう。

「彼にふさわしい助け」――ヘブライ語で「ezer kenegedo」――とは、正確には何を意味しているのでしょうか。

> **ʿēzer**＝「**力、助け、救い手（男性形）、救い手（女性形）、守り手、力強さ**」
>
> 旧約聖書では16回「神は私たちの助け」として、3回は軍事的な守り手について用いられています。ですから決して従属的なものではなく、むしろ逆に、上位にあるものでさえあり得ます。
>
> **kěnegědô：kě**＝**～として**＋**negěd**＝**前に**＋**ô**＝**彼の**「**彼の前にいるような**」
>
> 字義どおりには、この表現は「彼の前にいるような力」という意味を伝えています。
>
> 平たく言えば、「彼に釣り合う強さ」という意味です。

助け手としての女性は、目下の者を描いているのではなく、服従や階層を根拠づけるものでもありません。むしろアダムには魂の伴侶が必要なのです。同盟者が。パートナーが。向かい合う者、補い合う者が。自分の存在のあらゆる面――身体的、心的、霊的、知的、外面的にも内面的にも――に対応する相手が。要するに、それこそが「彼にふさわしい助け」という言葉の意味するところです。

パウロも男と女の創造を視野に入れて、こうまとめています。「とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるのではなく、男も女なしにあるのではありません。」（コリント第一11:11）

堕落以前の創造の秩序は、男と女を同等で、同じ権利を持つ者として見ています。そこに階層はありません。階層があったはずはないのです。なぜなら、それは堕落の後に初めて始まるからです。

> 「また、女にはこう言われた。『……あなたは夫を恋い慕うが、**彼はあなたを支配することになる**。』」（創世記3:16）

これは堕落の結果を描写したものです。男が女を支配することは、創造における神のみこころではありませんでした。この支配は罪深いものです。今日に至るまでの歴史が、この悲劇を痛ましいほどに証明しています。そこには良いものは何一つなく、霊的なものも何一つありません。**それは創造の秩序ではなく、むしろ堕落の結果としての創造の「無」秩序（SchöpfungsUNordnung）なのです。** 堕落した被造世界における強者の支配です。ですから私たちは、この男性による一方的な支配を支持すべきではありません。たとえそれがキリスト教化され、新約聖書の中に読み込まれている（エイセジェシス）としてもです。

歴史的論拠

イスラエルの歴史も、新約聖書の歴史も、そして教会の歴史も、女性が教え、指導してよいこと、それができること、そしてそうすべきであることを、疑いの余地なく示しています。こうした女性たちは、ごく当然のこととしてこれらの役割の中で描かれています。それが例外だとされている箇所はどこにもありません。まるで神が、男性がいなかったために、ご自身で定めた秩序を一時的に停止したかのように言われている箇所はないのです。

旧約聖書の女性たち

女預言者ミリアムは、イスラエルを導くために神によって遣わされます（ミカ6:4、参照：出エジプト15:20-21）。神ご自身がミカ書6章4節でこう言われます。「わたしはあなたをエジプトの地から導き上り、奴隷の家から贖い出し、あなたの前にモーセとアロンとミリアムを遣わした。」

つまり神ご自身が、ご自分の民の前に一人の女性をも遣わされたのです！男性が足りなかったわけではありません。モーセもアロンもいたのです。この指導チームに一人の女性を加えることが、神のみこころだったのです。

デボラは、「主が起こされ」、「イスラエルを敵の手から救った」士師の一人です（士師2:16, 18、4:10, 14, 24、5:1-31）。彼女は女預言者であり、全イスラエルの最高指導者でした（4:4-5）。妻で

あり母であった彼女は（4:4; 5:7）、イスラエルの軍司令官バラクに「行きなさい！」と命じる権威を持っており（4:6, 14）、彼は出て行きました。二人は共同の権威をもってよく協力しました。彼は軍の司令官として、彼女は**最高司令官**として。

王妃エステルは、ユダヤ人の敵7万5千人とともにハマンの家を滅ぼすことを実現させるほどの影響力を持っていました（エステル7:1-10、9:1-32）。モルデカイとともに「彼女は全権をもって書き記した……。エステルの命令がこれらの規定を確定した」のです（9:29-32）。

祭司たちは、再び見つかった律法の書について**女預言者フルダ**に伺いを立て、彼女の霊的な導きに従いました。王、長老たち、預言者たち、そして民を含むイスラエルの指導者たちは、彼女のことばを神から啓示されたものとして受け入れました（列王記第二22:14-23:3、歴代誌第二34:22-32）。一人の女性を通して語られた神のことばに対して、イスラエルの男性指導者たちが従ったことが、おそらくイスラエルの歴史上最大のリバイバルを引き起こしたのです（列王記第二22:14-23:25、歴代誌第二34:29-35:19）。

イザヤの妻は**女預言者**でした。「私は**女預言者**に近づいた。彼女は身ごもって男の子を産んだ。主は私に言われた。『その子に「急げ、略奪。速やかに、獲物」という名をつけよ。』」（イザヤ8:3）

旧約聖書のどの本文も、神が特別な事情があるときにだけ、女性が男性に対してこのような政治的・宗教的権威を行使するのを許したとは述べていません。また、これらの事例が聖書の原則に対する例外として描かれていることもありません。

新約聖書の女性たち

イエスとともに、古代ユダヤ教の男女の問題に、人間らしさの新しい次元が入ってきます。イエスの母は女預言者となり、そのマグニフィカト（賛歌）は霊感による聖書となります（ルカ1章）。かつてのハンナの賛美と同じようにです（サムエル第一2:1以下）。イエスのもとでは女性たちは尊重され、大切にされます。イエスは分け隔てなく彼女たちに心を向け、彼女たちの価値を高めます。イエスのもとで彼女たちは学ぶことが許され、また学ぶべきであり、イエスの女弟子となるのです。それは、わずかな例外を除けば、まさにタブーを破ることでした。

あらゆる自尊心を失っていた一人の女性に、イエスはご自分がメシアであることを明かされました。彼女は、それまでだれも聞いたことのないことばをイエスから聞きます。この出会いは影響を及ぼしました。最初のキリスト教の宣教師は一人の**サマリアの女性**だったのです。「さて、その町の多くのサマリア人が、その女のことばによってイエスを信じた」（ヨハネ4:39、4:28-42参照）。

女弟子たちがいました（ルカ8:1-3）。たとえばマリアです。彼女はイエスの足もとに座って学びます。それは、後でそれを他の人にも伝えるためでした。そうしてまさに、イエスがマタイの福音書28章で弟子たちに命じたこと、すなわちバプテスマを授け、教えることを行うのです。

復活のキリストが最初に訪ね、ご自分の復活と間近に迫った昇天の福音を告げ知らせるよう命じた人物は、**マグダラのマリア**でした（ヨハネ20:14-18）。「使徒」とは「遣わされた者」という意味ですから、キリストは彼女を**使徒たちへの使徒**に任じたと言うのがふさわしいでしょう。イエ

スは弟子たちに現れる前に、ご自分の復活の知らせを一人の女性によって彼らに伝えさせました。イエスは、すぐにご自分で彼らに現れることも難なくできたはずです。しかしこのことによって、彼らにこう教えようとされたのです。「女性の証言は、男性の証言とまったく同じように、あなたがた男たちに信じられるべきだ。わたしが彼女を遣わしたのだから！」新しい救いの時代が、まさに始まろうとしていたのです！

キリストにとって、指導――キリストはそれを謙遜に仕える指導として新たに定義しました（たとえばヨハネ13:3-17）――は、女性にとっても、少なくとも男性にとってと同じだけふさわしいものです。

ローマ人への手紙16章1–16節で、パウロは、キリスト教の奉仕における同労者と呼ぶ十人の人々に名を挙げてあいさつしています。**その十人のうち七人が女性です。**

フィベ、「ケンクレアにある教会の女性執事」（16:1）であり、「多くの人の、そして私自身の保護者（指導者）[2]」（16:2）。

ユニア、「使徒たちの間で際立っている」（16:7）。彼女は夫とともに、福音を宣べ伝えたためにパウロと一緒に投獄されていました。

プリスカ、「キリスト・イエスにある私の同労者」（16:3、参照：ピリピ4:3）。

そして**マリア、トリファイナ、トリフォサ、ペルシス**は「主にあって熱心に労苦した」人々です（16:6, 12）。

コリント人への手紙第一16章16節は、信者たちに「**すべての同労者に従う**」よう求めています。テサロニケ人への手紙第一5章12節では、「**あなたがたの間で労苦している人たち**」が「**主にあってあなたがたを指導している人たち**」と言い表されています。ここで問題になっているのは、指導の責任を担う人々なのです！どれほど強調してもしすぎることはありません。つまりパウロはこれらの女性たちを単なる信者として列挙しているのではなく、奉仕における女性指導者として挙げているのです。パウロはこの箇所で多くの信者にあいさつしていますが、同労者、すなわち指導者と呼んでいるのは十人だけで、そのうち七人が女性なのです。三人の男性はアキラ、アンドロニコ、ウルバノです。最初の二人はそれぞれの妻とともに名を挙げられており、そのことが彼らの共同の権威を際立たせています。

公的な共同体の指導者の中にこれほど高い割合の女性をパウロが挙げていることは、古代ギリシア文学の歴史全体の中でも比類のないことです。それは、初代教会において女性の指導が、当時の文化としては並外れた重要性を持っていたことを示しています。

伝道者ピリポの四人の娘たちは、ヨエルの約束がペンテコステにおいて、娘たちに対しても成就したことの証拠です。

> 「翌日、私たちはそこを出発してカイサリアに着き、あの七人の一人である伝道者ピリポの家に入って、そこに滞在した。この人には**預言をする未婚の娘が四人いた。**」（使徒21:8-9）

ニンファが教会の指導者の一人であったことは、必然とまでは言えないにしても、十分に考えられることです。彼女はラオディキアの教会のために自分の家を提供していたからです。

> 「ラオディキアの兄弟たちに、また**ニンファ**と彼女の家にある教会に、よろしく伝えてください。」（コロサイ4:15）

パウロはピリピで、互いに意見の合わない二人の女性に言及しています。きっと彼女たちは教会にとって重要な奉仕に携わっていたのでしょう。そうでなければ、パウロが二人を直接名指しで呼びかけることはなかったはずです。

> 「**ユウオディア**に勧めます。**シンティケ**に勧めます。主にあって同じ思いになってください。そうです、真の協力者よ、あなたにもお願いします。彼女たちを助けてあげてください。この人たちは福音のために私とともに戦ったのです。（ピリピ4:2-3）

パウロがまだキリストのうちになく、教会を迫害していたとき、ルカが二度報告しているように、彼は男性**も**女性も狙って牢に入れようとしました（使徒8:3、9:2）。なぜ女性までも？人はいつも指導者を排除するものです。群れの普通の羊たちには、あまり、あるいはまったく関心が向けられません。今日に至るまで、キリスト者が迫害されている国々では同じことが行われています。

その他の女性たち

初期の教会、中世、宗教改革、そしてリバイバル運動の中で女性たちが成し遂げてきたことという、非常に広い分野に今ここで踏み込む時間はありません。何千人もの女性が教え、指導してきました。彼女たちがいなければ、今日のキリスト教界はおそらく違った姿になっていたでしょう。その多くは名前が知られています。女性の長老もいれば、女性の説教者や女性の教師もいました。

また、女性たちが言葉によってだけでなく、書くことによっても教え、指導してきたことが忘れられがちです。キリスト教会の歴史に大きな影響を与えた有名な女性の賛美歌作者や女性作家たちがいます。

全体として見れば、彼女たちが男性に比べて少数派であったことは確かです。それはその時々の文化的状況から説明がつきます。そこでは女性はいつでもどこでも多かれ少なかれ不利な立場に置かれ、公の場に出るべきではないとされていました。まさにそれこそが、創世記3章16節の影の下にある世俗の文化と刻印なのです。それは神の国とは、そして今やキリストにあって現実となったものとは、何の関係もありません。

救済論的論拠――キリストにある救い

主を呼び求め、主に信頼する者はみな救われます。それが福音の良い知らせです。救い、救済、そして永遠のいのちは、例外なくすべての人に開かれています。パウロはガラテヤ人への手紙3章26–27節でガラテヤの人々にこう書いています。

> 「**あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の息子たち［となったの］です。キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。**」

神の息子となるという特権は、男性にも女性にも与えられています。パウロの用語では、女性もまた「神の息子たち」となるのです。もちろん彼女たちは女性として神の娘でもあります。しかしここでパウロは、ローマ帝国において息子たちが持っていた社会的地位を強調しているのです。この特権が今や、神との関係において、女性を含むすべての人に与えられるのです。

さらに、まさに女性たちにとって意義深いことがあります。神の息子となったしるしとして定められたのは、女性には不可能な割礼ではなく、水のバプテスマなのです。

それに続けてパウロは、当時の状況にとっては爆発的な影響力を持つ言葉を述べます。**彼は、キリストにあってすべての人が救われ得ることをもう一度断言しているのではありません。それはすでに多くの箇所で述べているからです。彼が目指しているのは、キリストにあっては民族的・社会的・性的な違いがもはや何の役割も果たさないということなのです。**

> **「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」**（ガラテヤ3:28）

ガラテヤ人への手紙2章11節–3章28節でパウロは、女性を含むある社会的集団を教会の中で不平等に扱うことは福音に反する、と強調しています。彼は、使徒ペテロを含むユダヤ人キリスト者たちを、異邦人キリスト者を対等な者として扱わず、彼らと同じ食卓で食事をすることさえ拒んだことのゆえに糾弾します。パウロは、民族的帰属や社会的身分や性別に基づいて教会内での地位や特権を割り当てることは福音に反する、と論じています。すべてのキリスト者の救いのアイデンティティは、ただキリストのうちにのみ根拠を持つのです！

これらはすべて社会的な区分であり、また「キリスト・イエスにあって」は教会を指しているので（**1:22**）、ガラテヤ人への手紙3章28節の最も明白な適用は、教会における社会的関係に対するものです。**この箇所は、救いを教会における社会生活と切り離せない形で結びつけています。** パウロのすべての著作においてそうであるように、キリストにある贖いは、キリストのからだにおける生活から切り離すことができません。パウロがこれらの区別を退けていることは、その反対の帰結をもたらすはずです。すなわち、教会の実際の生活においてこれらすべての集団が同等の地位にあることの確認です。なぜなら彼らはみな、キリストにあって一つだからです。

ここに挙げられた三つの人間集団は、キリスト者となっても、もちろん生まれたときのままの者で**あり続けます**（奴隷はおそらく例外で、自由になることができました）。しかし当時の世界、そして今日の世界の慣習、排除、差別は、教会の中、新しい創造の中ではもはや通用しません。男と女に関して言えば、彼らの本来の創造に基づく関係が、キリストにあって回復されているのです。ごく普通の男女の奴隷でさえ、教会の中では教師や指導者になることができました。もっとも、教会の外での社会的な関係においてはそうではありませんでしたが。

ガラテヤ人への手紙3章28節に密接に並行するのが、コリント人への手紙第一11章11節です。

> **「とはいえ、主にあっては、女は男なしには何ものでもなく、男も女なしには何ものでもありません。」**

パウロはこれを、女性も男性と同じように教会の公の集会で最も重要な活動を導くことができる――すなわち祈り（礼拝の垂直的な次元、神に向かって語ること）と預言（礼拝の水平的な次元、人々に向かって語ること）――ということを確認する文脈の中で述べています。ただし、結婚とキリスト教の道徳を否定しない仕方でそれを行う限りにおいてです。**したがって、「主にあって」男と女の分離を否定するこの言葉は、少なくとも教会の指導にかかわるこれらの活動については当てはまるはずです。**

民族的・社会的・性的な区別が教会においてもはや何の意味も持たないという救いの事実を、パウロはもう一度はっきりと、コリント人への手紙第二5章16節以下で言い表しています。

> 「**ですから私たちは、今後、肉によって人を知ろうとはしません。**かつては肉によってキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。これらのことはすべて、神から出ています。神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、**和解のことばを私たちに委ねられたのです。**」

私たちがもはやだれをも肉によって知らないのなら、性別もまた重要ではありません。キリストにある新しい被造物だけが大切なのです。では、神と和解したこの新しい被造物は何をするのでしょうか。和解を宣べ伝える務めを果たすのです！つまり、すべての人が宣べ伝えるのです。

キリストを肉によって判断した人々は、おそらく「この大工の息子が私たちに何を言おうというのか」と考えたことでしょう。ただ耳を傾けた人々は、イエスが「権威ある者のように」教えておられることに気づきました。ですから私たちは、すべての人を霊的に判断し、最初に目に飛び込んでくるもの（社会的地位、外見、性別）をすべて脇に置くことを学ばなければならないのです。

カリスマ（賜物）に基づく論拠

聖霊は女性にも男性にも等しく注がれています。御霊は、信仰を持つすべての女性とすべての男性に、みこころのままに賜物を与えられます。賜物（カリスマ）の列挙の中には、教える賜物と指導する賜物が含まれています。**性別による区別はどこにもなされていません。** 次の聖書箇所は、ペンテコステの出来事から始めて、それ自体で明らかに語っています。

> 「これは、預言者ヨエルによって語られたことです。『神は言われる。終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。**あなたがたの息子や娘は預言し**、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日わたしは、わたしのしもべにも**はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。**』」（使徒2:16-18）

聖霊はまた、霊的な恵みの賜物を与える方でもあります。その賜物によって、キリストのからだである教会は生かされ、支えられ、導かれ、養われるのです。そこには指導する賜物、すなわち人々の先に立つ賜物も含まれています。

> 「私たちは、与えられた恵みにしたがって、異なる賜物を持っているので、それが預言であれば、その信仰に応じて預言し、奉仕であれば**奉仕し、教える人であれば教え**、勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、**指導する人は熱心に指導し**、慈善を行う人は喜んでそれを行いなさい。」（ローマ12:6-8）
>
> チューリッヒ訳（Zürcher Übersetzung）〔ドイツ語聖書翻訳〕：7 それが仕える賜物であれば、**奉仕が問われるところで仕え、教えが問われるところで教え**、8 慰めが問われるところで慰めを与えなさい。人に何かを与える人は下心なしにそうしなさい。**指導の務めを担う人は献身してそれを行いなさい**。あわれみを行う人は明るく喜んでそれを行いなさい。
>
> 「神は教会の中で、ある人たちを任命されました。第一に使徒たち、**第二に預言者たち、第三に教師たち**、それから力あるわざ、それから癒やしの賜物、助ける働き、**治める働き**、種々の異言です。」（コリント第一12:28）

カリスマ（賜物）に基づく論拠は、それ自体で明らかで、説明を要さず、最も明白なものです。いったい神は、その人がからだを建て上げるために用いてはならないような賜物を、何のためにお与えになるのでしょうか。ここに挙げた賜物が女性にも授けられていることは、指摘するまでもありません。神が女性を置かれるあらゆる場で女性がそうした賜物を用いてはならないとすれば、それは一種の「システムエラー」でしょう。賜物とは常に、務めであり責任でもあるからです。

女性の賜物が教会での務めにならないとき、何が起こるでしょうか。パウロがコリント人への手紙第一12章21節で描いていることが起こるのです。「**目は言うことができません**。手に向かって『あなたは**いらない**』とは。また、頭も足に向かって『あなたがたは**いらない**』とは言えません。」 からだのいくつかの部分は、本来なら謙遜に他の部分の奉仕を受け入れるべきなのに、まさにそれをせず、「私たちはあなたがたを必要としていない」と言うのです。こうして女性たちは落胆させられ、傷つけられます。賜物を持つ女性たちは、自分の賜物に合った働きの場を教会の外に求めるようになります。こうしてキリストのからだの働きは損なわれます。神がもしかすると、この姉妹を通して、預言によってであれ教えによってであれ、私たちに語ろうとされたかもしれないことが、聞かれないままになるのです。その結果、私たちは女性たちを制限するだけでなく、神ご自身を制限してしまうのです！なぜなら神は、男性を通してと同じように、女性を通してもご自身を表されるからです。そうです、「風（霊）は思いのままに吹く」というのは本当です。神の御霊は、思いのままに吹くことを人間の構造によって妨げられることはありません。しかし私たちは御霊を消し、御霊を悲しませることはできます。そして私たちは、なんと何度もそうしてきたことでしょうか！

まとめ

旧約聖書でも新約聖書でも、聖書全体は女性が教え、指導することを禁じて**いません**。そこから反対のことを導き出そうとする聖書箇所は、正されるべき、あるいは取り除かれるべき地域的な問題を描いているのです。女性たちは、キリスト以前の時代にも、キリスト教の初期にも、そし

て教会史全体を通じて、教え、指導してきました。理解できる文化的な理由――しかし聖書的ではない理由――から、女性は男性に比べて少数派でした。

性別による公正、つまり男女同権は、神の国の価値です。それは新たに発見され、神のみわざのために守られ、推し進められるべきものです。

もし女性が男性と同じように教え、指導することが神のみこころであるのに、それが男性たちによって、どのような理由や動機からであれ、意識的にせよ無意識的にせよ、いつも妨げられているのだとしたら、それは肉に蒔く種でしょうか、それとも御霊に蒔く種でしょうか。

「女性が神と隣人に仕えるための前提条件を決めるのは、『公式の』職務に就く女性の権利でもなく、またそれらの職務において男性と同等であることでもありません。そうではなく、むしろそれを決めるのは彼女たちの義務なのです。しかもそれは、神の賜物によって力を与えられた、彼女たちの人間としての能力から生じる義務なのです。」 ダラス・ウィラード（Dallas Willard）

男女の関係についての私の定義

補完主義（Komplementarismus）とは、本来の言葉の意味では、同じ大きさ、同じ強さ、同じ価値を持つ二つのものが補い合い、共に歩むことを意味します。女性が、たとえば時間的にアダムの後に、アダムから造られたという理由で、従属的な、あるいは下位に置かれた助け手と見なされるなら、それは成り立ちません。しかし「補完主義」という用語は今日の神学的議論においてそのように使われているので、聖書的な男女関係についての私の定義には合いません。

とはいえ、平等主義（Egalitarismus）も、私個人にとってはぴったり合う用語ではありません。なぜならそれは、まさに相互に補い合うという考えの前提となっている男女の違いを、少なくとも言葉の上では弱めるか、見えなくしてしまうからです。聖書的な男女関係についての私の理解を短くまとめると、次のようになります。

補完的平等主義（Komplementärer Egalitarismus）

つまり、相手が弱いところで相手を強める、相互の補い合いと共に歩む歩みであり、愛と互いに従うことの中で一致が生きられることです。

私自身、私の妻、そして多くの姉妹たちや夫婦たちが、完全な男女の平等の聖書的な根拠を解放として体験し、イエスとの関係、また互いの関係を新しい次元で知るようになりました。この自由は、福音の自由の確かな一部です。女性であることが制限や縮小ではなく、神が初めから望まれた姿とあり方へと価値を高められることであるなら、それは良い知らせです。

私の本のタイトル『Frauen, vergebt uns!』（『女性たちよ、私たちを赦してください！』）は、私たち男性が――もちろん、それを認める者たちだけですが――解釈の主導権と指導の主導権を奪い取り、女性たちをそこから締め出してきたことを、率直に言い表そうとしています。私は、自分自身も支持してきたこの差別を恥じています。私はこの本によって、公にそれと決別しました。私の本に対する一部の兄弟たちの憤りは、自分たちの支配が問われたときに男性がどのように反応するかという姿勢を私に示しています。これは終わらなければなりません。とうの昔に終わっているべきだったのです。

2023年9月16日、FeG Rhein-Sieg（ライン＝ジーク自由福音教会）での講演、Hans-Jörg Ronsdorf

この講演はホームページから自由にダウンロードできます：www.hans-joerg-ronsdorf.de

注

1. 私は、両方の性の人々を指す総称として総称的な男性形（ドイツ語の generisches Maskulinum）を用い、明確さのために私の考えで必要または有益と思われるところでは例外を設けています。
2. **Prostatis**（プロスタティス）は、ギリシア語の「上位に、前に」と「立つ」を表す語から成り立っています。ここに当てはまり得る、新約聖書の関連語すべてのどの意味も、指導に関係しています。